全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会新潟大会（平成 26 年 10 月 30･31 日）
上越市立春日小学校研究発表会･1年生授業協議会(10月31日)資料

生活科における中・大型動物飼育の意義

上越教育大学大学院　木村吉彦

１.『小学校学習指導要領解説　生活編』「内容（７）動植物の飼育・栽培」より

（７）動物を飼ったり植物を育てたりして，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもち，また，それらは生命をもっていることや成長していることに気付き，生き物への親しみをもち，大切にすることができるようにする。

☆動物飼育の意味するもの

①継続的な飼育活動による動物への親しみ(生命の大切さへの実感)と責任感の育成

動物飼育（特に中・大型動物飼育）においては、毎日のえさやりや小屋掃除など、日常的な活動が継続的に行われる必要がある。日常生活の中で生命と触れ合い、かかわり合う機会によって生き物への親しみをもち生命の大切さを実感することで、日々の活動（えさやり・小屋掃除等）の必要性と責任感を育成することができる。

②動物飼育による多くの気付き

継続的な飼育活動によって、動物が生命をもって生きていることへの気付き、動物と自分とのかかわり方への気付き、頑張った自分、優しく接することができた自分自身への気付きもはぐくまれる。このような児童の姿を引き出すには、繰り返し動物とかかわる息の長い活動を設定することが大切である。

③動物飼育による気付きの質の高まり

継続的な活動によって、親しみの気持ちが生まれ、責任感が育ち、生命の尊さも感じることができる。それらの体験にもとづく感性や精神面での成長によって、自分本位の見方・考え方から、動物の立場に立った見方・考え方ができるようになり、気付きの質の高まりも期待できる。

④動物飼育過程における貴重な体験

飼育過程では、新しい生命の誕生や突然の死や病気など、生命の尊さを身をもって感じる出来事に直面することもある。成長することの素晴らしさや尊さ、死んだり病気になったりしたときの悲しさやつらさ、恐ろしさは、児童の成長に必要な体験でもある。動物とのかかわりを真剣に振り返り、その生命を守っていた自分に気付く機会と捉えることが大切である。

⑤動物飼育への配慮

動物飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などについて配慮する必要がある。専門的な知識をもった地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して、よりよい体験を与える環境を整える必要がある。休日や長期休業中の世話なども組織的に行い、児童や教師、保護者、地域の専門家などによる連携した取り組みが期待される。

２．中・大型動物飼育の特徴

前述の動物飼育の意義を前提としながら、中・大型動物飼育を選ぶことによってもたらされる児童たちの成長について考えてみたい。上越地域では、ヤギ･羊の飼育が多い。さらに、学校によっては、牛やロバ、馬・ポニーなどの大型動物を生活科における飼育活動の対象としているケースも観られる。

①身体面での成長への気付き

中・大型動物を幼い時期から受け入れることで、３ヶ月から６ヶ月後の身体上（身長・体重）の成長の大きさに児童たちは気付きやすい。中・大型動物への成長の気付きをもとに、児童たちに成長話題を提供することで、児童自身の身体面での成長に結びつけることができる。このことは、精神面のみならず「身体面での自分自身の成長に気付く」という自己認識の高まりを意識することにつながると思われる。

②話し合い活動のしやすさと相手意識の引き出し

かつての上越教育大学附属小学校１年生による、ウシ飼育を事例として伝える（現春日小５年担任・武井由香教諭)。発生する一つ一つの課題を丁寧に取り上げ、じっくり話し合って解決方法を導く経験を積ませたいと武井先生は考えていた。子ウシから授乳を通して育てたことで、児童たちはウシの「つよし」への愛情をはぐくむことができた。さらに、飼育に付随して発生する課題に向き合い、友達と試行錯誤しながら自分たちなりの答えを導いたり、飼育活動を振り返ることで、自分の考えや行動に自信をもてるようになった。予想された最も大きな課題は、ウシの大きさや成長の早さである。この課題が、本単元最大の課題である「冬のつよし」についての「モーモーかいぎ」につながった。この会議によって、「冬にかつての持ち主へ返すことでつよしは幸せになれる」という結論が見出された。「ウシのつよしにとって幸せとは何か」という相手意識の高い話し合い活動を実現しやすいのが、中・大型動物飼育の特徴の一つである。この話し合いは、幼児教育との連携・言葉と体験の結びつき・生命の尊さへの実感・話し合い活動によるコミュニケーション力育成、という生活科の今日的課題に全て対応可能であった。

③相手意識に基づく社会性の芽生え

中・大型動物とのかかわりから、児童たちは人間関係の原則を学べるようである。中・大型動物とのかかわりとなると、動物は遊ぶにしてもお世話をするにしても、児童たちの思い通りに動いてくれない。今回の春日小のヤギ飼育では、「ヤギさんとの散歩」体験がそれを意味する。すなわち、「ヤギさんの身体の大きさ」、そして「ヤギさんが散歩をいやがっている」という現実は、児童の「自己中心性」を許してくれない。ヤギさんとの共存は「自分が相手に合わせること」によってしか実現しないのである。児童たちは、自分と違う「生」を生きるヤギさん、ヤギさんとは違う「生」を生きる自分に気付かされ、ヤギさんを通して「自他の違い」という「社会的な資質」をいやというほど学んだ。これは、「相手意識（ヤギさんとはどのような存在か、ヤギさんにとって可能な活動はどういうものなのか、ヤギさんにとって自分は何をしてあげればいいのか)」を意味し、「社会性の芽生え」を意味していると考える。

一方、②での話し合い活動からも言えるが、当番制による友達（クラスメイトや同学年児童）とのかかわり体験によって、ヤギさんのみならず「お友だちのために、自分は何をすればいいのだろうか」という意識も芽生える。文字通りの「相手意識」が育つきっかけになるのが、飼育小屋への対応が必要となる中・大型動物飼育である。